

さわって楽しむ絵 一本物を鑑賞することで得られる豊かさー

(板橋区立美術館と協働開発した授業)

A表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)(イ)、B鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

[対 象] 北区立浮間中学校 3年1～5組(各38～9人)

[授業者] 教諭 金原 たかね

1 題材の概要と、大会テーマ、分科会テーマとの関連

本題材は、板橋区立美術館との協働で開発したものである。授業でアーティストやクリエイターが作った作品を鑑賞する場合、その写真や動画を用いることが多いが、本来は実物を鑑賞できた方が良い。そのため、本校から最も近い美術館である板橋区立美術館と連携し、本物の作品を使った題材を模索した。

大会テーマとの関連として、生徒自身が「だから美術を学んだ」と思える授業を目指し、生徒が授業での学びと、生活や社会とをつなげて捉えられるようにした。具体的には、導入や鑑賞する題材の選定、自分の見方や感じ方が深まる実感、美術館との連携で生涯学習につなげることを工夫した。

分科会テーマとの関連として、感覚の中でも触覚を研ぎ澄ませることに重点を置いた。美術科では視覚を扱うことが多いが、学習指導要領では視覚に限定しているわけではない。視覚に限らない様々な感覚を通して、生徒の感性が豊かになることが大切だと考え、本題材では触覚を取り上げた。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① 触覚が感情にもたらす効果や、触覚や質感、色彩などの組み合わせなどを基に、全体のイメージで捉えることを理解する。

技 ② 素材の特性を生かし、意図に応じて表現方法を追求し、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表す。

イ「思考・判断・表現」に関する目標

発 ① 「さわる絵本」を通して得た気づき、コミュニケーションの楽しさ、素材や質感などを基に主題を生み出し、触覚的な効果を考え、創造的な構成を工夫し心豊かに表現する構想を練る。

鑑 ② 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫、生活や社会を豊かにする美術の働きについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。

ウ「主体的に学習に取り組む態度」に関する目標

態発 ① 美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に素材や質感をもとに構想を練ったり、自分の表現方法を追求して創造的に表したりする表現の学習活動に取り組もうとする。

態鑑 ② 美術の創造活動の喜びを味わい、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫、生活や社会を豊かにする美術の働きについて考えるなどの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとする。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
<p>①知:触覚が感情にもたらす効果や、触覚や質感、色彩などの組み合わせなどを基に、全体のイメージで捉えることを理解している。</p> <p>②技:素材の特性を生かし、意図に応じて表現方法を追求し、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しを持って創造的に表している。</p>	<p>①表:「さわる絵本」を通して得た気づき、コミュニケーションの楽しさ、素材や質感などを基に主題を生み出し、触覚的な効果を考え、創造的な構成を工夫し心豊かに表現する構想を練っている。</p> <p>②鑑:造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫、生活や社会を豊かにする美術の働きについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。</p>	<p>①態表:美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に素材や質感をもとに構想を練ったり、自分の表現方法を追求して創造的に表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>②態鑑:美術の創造活動の喜びを味わい、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫、生活や社会を豊かにする美術の働きについて考えるなどの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

3 指導観

(1)題材観

- ・感性を豊かにする

美術科の目標は、学習指導要領で「美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」とされている。このように、美術科は、「喜び」や「感性を豊かに」「豊かな情操」といった、感情にダイレクトに働きかける教科である。そこで、特に感性を豊かにすることに主眼を置いた授業を行うことにした。

- ・美術館との連携の参考事例を目指す

本校は北区の学校だが、都中美板橋大会の研究授業なので、板橋区立美術館と連携する授業モデルの構築に挑戦した。本授業では、板橋区立美術館のコレクションから「さわる絵本」を借用した。

板橋区立美術館が学校に収蔵品を貸し出すのは初めてである。ゼロから連携方法を相談する中で、「さわる絵本」を借用することになった。板橋区立美術館と近隣の学校との連携モデルとして、また、その他の地域でも美術館と公立中学校の連携の参考事例としての授業を目指した。

- ・鑑賞と表現の一体化

美術館と連携した授業は鑑賞中心になりがちだが、本題材では鑑賞から表現へと発展する一体的な学習構成とした。

(2)生徒観

3年生は進路を意識し、抽象的・論理的な思考が発達する時期である。その一方で、感覚的・情緒的な活動から離れやすい傾向にある。そこで本題材では、触覚を通して感覚と理性を結びつける体験を重視し、他教科で培った思考力と関連付けながら、造形的な視点をより豊かにし、多様な見方や考え方を養うことをねらいとした。

(3)教材観

- ・触覚の豊かさ

普段生活する上で視覚情報は大きな情報源であり、美術科でも視覚情報をもとにした作品制作・鑑賞が大部分を占めている。一方で、触覚は人間を含めた動物にとって根源的な知覚とも言われる重要な知覚である。そこで、見過ごしがちな「触覚」の豊かさに気付かせる授業を行うことにした。

- ・実物の「さわる絵本」に直接触れて鑑賞すること

「さわる絵本」は視覚障害者向けに開発された絵本である。日本では、人気の絵本に点字と触図(透明な樹脂インクで盛り上げて印刷した絵)をつけたものが主流だが、その触覚情報は視覚情報を補足するものに過ぎない。一方で、発展した「さわる絵本」は触る楽しさを第一目的に、素材や加工が工夫されていて、視覚障害の有無に関わらず対等に楽しめる。「さわる絵本」からは様々な形や質感、動く仕掛け、物語性、一緒に読む人とのコミュニケーションなど、触覚から得られる多様な楽しさを味わうことができる。また、視覚的な楽しさを排除しているわけではなく、見る楽しさもある。

- ・発達の段階に合わせた表現の活動

表現の活動では、「さわる絵本」ではなく「さわって楽しむ絵」を制作した。絵本の場合は物語の展開についても構想を練る必要があるため、難易度が格段に上がってしまう。一方で、絵の場合は触覚の豊かさに集中しやすくするため、本題材のねらいに適している。

- ・板橋区立美術館と連携した教材開発

生徒の活動をより豊かに展開していく観点から、学校と板橋区立美術館が活動のねらいをお互いに共有しながら連携を推進した。その上で、美術館から「さわる絵本」を借用し、美術館と教師が共同で教材を開発した。板橋区立美術館は「さわる絵本」の収集と研究を進めていて、「さわる絵本」に関する様々な知見やネットワークをもっている。美術館は、海外の「さわる絵本」作家を招いた講座を開くなかで、新たな「さわる絵本」作家たちを輩出してきた。美術館が主催する「さわる絵本」の講演会には、視覚障害教育やインクルーシブアート教育の研究者も参加している。館長、学芸員、クリエイター、研究者から、本授業の鑑賞と表現の活動の両方について多数のご助言をいただいた。

4 材料・用具

- ・2～4時間目「さわる絵本」鑑賞に使用したもの

指導者:「さわる絵本」15冊(板橋区立美術館から借用)


生徒:アイマスク(バンダナ・ハチマキでの代用可)、タブレット端末、一般的な絵本

- ・5～13時間目「さわって楽しむ絵」の制作・3時間目「触覚サンプル」づくりに使用したもの

指導者:台紙(B4イラストボード)、接着剤(木工用接着剤、強力接着剤、グルーガン)、粘着テープ(両面テープ、セロファンテープ)、ホチキスほか

生徒:素材(紙、段ボール、梱包材、布、綿、モール、ファスナー、卵パック、ワインコルク等)、絵の具セット、色鉛筆、裁縫セット、タブレット端末、クロッキー帳、ほか

5 指導計画と評価計画(全14時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1 5 4	鑑賞 「さわる絵本」の鑑賞などをし、作者の表現の意図と工夫などについて考え、見方や感じ方を深めるとともに、素材や質感などの触感が感情にもたらす効果を理解する。  	1 一般的な絵本の多様なよさや美しさについて考える。 ・自分の親しんできた絵本を選び、その絵本を選んだ理由や、よさや美しさについて考え、スライドにまとめる。 ・お互いのスライドを見て、感じ取ったことや考えたことなどをワークシートにまとめる。 2 「さわる絵本」鑑賞1回目 多様なよさや美しさを感じ取る。 ・4人班で交代で目隠しをしながら4冊の「さわる絵本」を鑑賞し、作品から感じたことや考えたことを話し合う。 ・目隠しした生徒を案内したり、写真記録をしたりしながら、「さわる絵本」の多様なよさや美しさについて考え、見方や感じ方を深める。 ・自分が1番気に入った1冊を選び、その1冊を選んだ理由や、触感の特徴などから感じたことなどをワークシートにまとめる。 3 触感サンプル(様々な素材を加工し、その感触を言語化した言葉と並べたもの)をつくり、見方や感じ方を深める。 ・4人班で「触感サンプル」を作成しながら、素材や質感などの触感が感情にもたらす効果を考える。 ・クラス内でお互いの「触感サンプル」を鑑賞し、感じ取ったことや考えたことなどをワークシートにまとめる。 4 「さわる絵本」鑑賞2回目 作者の表現の意図と工夫などについて考え、見方や感じ方を深めるとともに、素材や質感が感情にもたらす効果を理解する。 ・「さわる絵本」を鑑賞し、作者の意図と表現の工夫などについて考え、写真と言葉でスライドにまとめる。 ・お互いのスライドを発表し、見方や感じ方を深め、ワークシートにまとめる。 ・新たな「さわる絵本」を鑑賞し、新たな見方や感じ方を広げる。	イー① ウー① ウー② アー① ウー① アー① イー② ウー②
5 7	発想や構想 主題を生み出す。 主題を基に構想を練る。 	5～6 鑑賞の学習で学んだことを生かしながら、形や質感や仕掛けなど感情にもたらす効果などを考え、試作をつくり、主題を生み出す。 7 生徒が生み出した主題を基に、作品全体と部分との関係を考えてスケッチをし、創造的な構成を工夫し構想を練る。 	イー① ウー① アー② ウー①
8 13	制作 発想や構想を基に、意図に応じて表現方法を創意工夫し、見通しをもって表す。 	8～13 形や質、仕掛け感などが感情にもたらす効果を生かし、意図に応じて表現方法を創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表す。また、制作の途中に鑑賞を行い、客観的な視点に立って作者の作品を見たり他者の作品を見たり自分の意図を説明したりすることにより、表したいものをより一層明確にしていくなどしながら作品を完成させる。 ・インクルーシブな美術の実践について理解し、生活や社会を豊かにする美術の働きについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。 ・形や質、仕掛け感などが感情にもたらす効果を生かし、意図に応じて表現方法を創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表す。 ・客観的な視点に立って自分の作品を見るために、毎回の授業の最後に作品の記録写真とコメントをICTのポートフォリオにまとめる。	アー①② イー① ウー①
14	鑑賞 生徒作品や美術作品などから、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考え、見方や感じ方を深める。   	14 お互いの完成した作品を鑑賞し、作品から感じたことや考えたことを説明し合う。 ・4人班でお互いの作品を鑑賞し、感じ取ったことや考えたことなどをワークシートにまとめる。 ・クラス内でお互いの作品を鑑賞し、感じ取ったことや考えたことなどを付箋にまとめ、作者に渡す。	イー② ウー②

6 指導にあたって

本大会の研究主題に基づき、触覚を中心とした感性の豊かさについて、実感を伴いながら理解をできるような指導を目指した。

- ・「さわる絵本」の楽しさを味わえる鑑賞活動

プロのクリエイターが制作した「さわる絵本」は、細部まで作り込まれていて、触覚的にも視覚的にも工夫が凝らされている。アイマスク等を持参させ、クラスメイトと交代で目隠しをして実物に触れる鑑賞は楽しい経験となる。板橋区立美術館から借用したという事実も特別感を後押しする。

- ・材料の性質や質感の可変性への気付き

材料には、硬さや軟らかさなどの性質や、材料のもつ地肌の特徴や質感による「冷たい」、「温かい」など、人間の感覚や感情に強く働きかける特性がある。紙を材料にした場合でも、種類によって手触りの違いがあったり、同じ紙でも蛇腹に折ることにより強度が出るなど、手を加えることによって性質や質感などが変化したりするものもある。異なる素材を組み合わせることによって、さらに複雑な質感が生み出される。

本授業では、材料の性質や質感を捉えさせるために、実際に材料を手にとらせ、その感触などを十分に確かめさせるとともに材料の可変性などに気付かせた。質感に対する経験を高めるために、「さわる絵本」に実際に触れながら観察させた。

- ・主題や意図に応じた表現をするための環境づくり

本授業の表現の活動では様々な材料を組み合わせることで作品をつくった。材料から発想や構想がふくらむ面もあるため、最初に2時間で試作を作らせてから、構想を練るスケッチをさせ、自分の表現意図をしっかりとめた。

形や質感、仕掛けなどで実現できるようにするために、生徒が自ら表現形式を選択し創意工夫できるようにした。材料を基本的に生徒に持参させるが、それ以外の材料も使えるように用意しておく。多様な材料に対応できるように、多様な接着剤を用意した。

- ・ICTを活用した鑑賞と表現の一体化

主題や意図に応じて表現できるように、鑑賞の活動との関連を図ることで様々な創造的な工夫に出合う機会をつくった。鑑賞の活動では、「さわる絵本」に見られる表現の工夫について、写真と言葉でスライドにまとめて発表させた。発表後もクラスメイトのスライドを自由に閲覧できるようにし、構想を練るときに見返せるようにした。

7 板橋区立美術館との連携に関するスケジュール

12月 部活動で板橋区立美術館を見学

2月 本大会実行委員長 西台中学校内田校長に板橋区立美術館との連携について相談
内田校長より、板橋区立美術館に連携を打診

3月 板橋区立美術館にて打ち合わせ① 連携方法を話し合い、「さわる絵本」の借用が決定

3月 板橋区立美術館主催「講演＆ワークショップ 手と目で楽しむ さわる絵本の世界」に参加

4月 板橋区立美術館にて打ち合わせ② 指導計画について相談、借用する「さわる絵本」を選定

5月 板橋区立美術館にて「さわる絵本」梱包・発送作業の立ち会い、借用書の提出
本題材スタート

6月 板橋区立美術館が授業参観

「さわる絵本」を板橋区立美術館に返却

8月 板橋区立美術館関連の「さわる絵本」作家によるワークショップに参加

10月 本題材終了



板橋区立美術館から借用した絵本

生徒作品



こころのスミ(墨)—水墨画の技法を用いて感情を表そう—

A 表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)、B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

[対 象]板橋区立高島第二中学校 8年1～3組(38～39人)

[授業者] 教諭 中山 朋子

1 題材の概要と、大会テーマ、分科会テーマとの関連

美術を「授業の中だけのもの」と捉えるのではなく、生活の中に生きている美術として意識し、表現や鑑賞に取り組むことをねらいとする。日常の一コマの感情を抽象画で表現し、他者と共有する。その中で「私はこういう一面を持っている」「あの人はこういう風を感じるんだ」という自己理解、他者理解を深める。生活の中に根ざした気持ちを主題として設定することで、日常に潜む美しさや思いを美術的に表出し、共有し、共感を生むことを目指す。また分科会テーマ「感性を研ぎ澄ませる」との関連については、墨の濃淡やかすれ、にじみを用いて、自分の感情を抽象的に表現する課題である。墨と向き合い、自分のこころの隅(スミ)にある感情を表現していく。その過程で、墨と水への感性を研ぎ澄ませることをねらいとしている。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① 墨の濃淡やにじみ、かすれなどの性質や、それらが感情にもたらす効果や造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解する。

技 ② 墨や筆、刷毛の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表す。

イ「思考力・判断力・表現力等」に関する目標

発 ① 抽象的に感情を捉え、それを基に主題を生み出し、にじみやかすれ、墨と水、筆や刷毛の組合せを考え、創造的な構成を工夫し心豊かに表現する構想を練る。

鑑 ② 造形的なよさや美しさを感じ取り、他の制作者の心情や表現の意図と墨と筆などの工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

態表 ① 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組む。

態鑑 ② 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に感じ取ったことや考えたことなどを基にした鑑賞の学習活動に取り組む。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
<p>①墨の濃淡やにじみなどの性質や、それらが感情にもたらす効果などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。</p> <p>②墨や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表している。</p>	<p>①抽象的に感情を捉え、それを基に主題を生み出し、にじみやかすれ、墨と水、筆や刷毛の組合せを考え、創造的な構想を工夫し心豊かに表現する構想を練っている。</p> <p>②造形的なよさや美しさを感じ取り、他の制作者の心情や表現の意図と墨や刷毛などの工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。</p>	<p>①美術の創造活動の喜びを味わい主体的に感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>②美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

3 指導観

(1)題材観

本題材は、「感情」を主題として抽象的な水墨画を制作するものである。具体的なイメージを用いず、墨の特性を生かして心の世界を表現する活動を通し、造形の本質である「形のないものを形にする」力を育てる。

(2)生徒観

第8学年の生徒は、美術における授業では前向きに制作に取り組み、授業者に言われたこと(励ましや制作のヒントとなる言葉かけ)を素直に受け取って授業に参加している。しかし、授業中に巡回してみたり、制作の途中で相互鑑賞したりすると、生徒同士作品について「こうしてみたら」「こうしたらこうなったよ」などの制作中の切磋琢磨する声が聞かれない。制作者が制作の意図や工夫を発表しても、あたりさわりなくほめて終わっているようだ。また、発想の段階でスケッチや文章を描いたものをみても、通り一遍の発想であったり、制作過程が一樣になりがちである。制作の見通しや工夫を自ら生み出す力の育成が課題である。

(3)教材観

本題材では水墨画のにじみやかすれを利用して自分なりの表現を探究し、自分の感情を抽象的に表現する。まず長谷川等伯の「松林図屏風」鑑賞し、水墨画の表現技法と心情表現の関係を理解する。その後水墨画の基本的な技法を端的に学び、墨に慣れてきたところで「感情の線」を描いて抽象的な表現を試作しつつ、感情を表す線から感情を表す面での表現へと移行する。技法を用いながら自分の心の中に迫り、具体的なものを描かずに感情を表現する課題を通して、抽象的なものの捉え方を獲得する。日常の一コマを切り取り、そのときの感情から主題を考え、感情をどのように表現したらよいか試行錯誤して制作していく。

制作過程では「失敗しても大丈夫」という姿勢を大切に、8枚までの制作を許可して試作を重ねる。その中から一枚を完成作品として提出する。また表現活動を通して、「試すこと」と「考えること」を繰り返す学習を通し、自然に鑑賞の視点を育む。他者の作品を通して自分の表現を客観的に振り返り、よりよい作品づくりにつなげることをねらいとする。

4 材料・用具

指導者: プロジェクター、参考作品、水墨画用紙、墨汁、筆、刷毛、新聞紙、水入れ、雑巾

生徒: パレット、毛氈、文鎮

5 指導計画と評価計画(全6時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1	モノクロームで描かれた作品を通し、抽象的な表現の見方や感じ方を深める。	長谷川等伯の「松林図屏風」鑑賞する。	イー② ウー②
2	墨や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表すことができる。	水墨画の技法を学び、自分の表現を探す手立てを獲得する。	ウー① アー①
3	墨の濃淡やにじみなどの効果から、感じ取ったことや考えたことなどを基に主題を生み出し、心の世界を豊かに表現する構想を練り、喜怒哀楽の「感情の線」を描く。	技法を用いて自分の思う感情を表す線をひいてみる。	ウー① イー①
4 5	墨の濃淡やにじみなどの性質や、それらが感情にもたらす効果を基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解し感情を表す水墨画を描く。	技法を用いて自分なりの表現方法を追求し、抽象表現としての水墨画を描く。	アー① アー②
6	抽象作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、お互いの作品の見方や感じ方を深める。	自分の作品についてまとめ、対話の時間を通し、造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の表現の意図や工夫を考え、伝え合い、見方、感じ方を広げる	イー② ウー②



1時間目 鑑賞



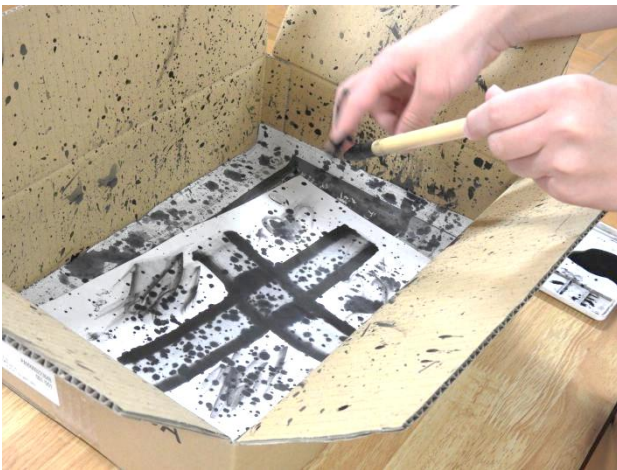
2時間目 水墨画の技法



3時間目 感情の線を描く



4時間目 制作①



5時間目 制作②



6時間目 鑑賞

6 指導に当たって

(1)「生徒理解」の視点から

豊かな発想を促す：日常の中にある自分の表したい感情を探す時間をしっかりととり、どのような感情を表現するかを決める。また、どうすれば自分の感情を墨で表せるかを、じっくり制作を通して深めていく活動を大切にする。

制作の機会を増やす：制作枚数を最大8枚までとすることで、失敗を恐れずに実験的な表現を繰り返すことができるようにする。完成度よりも表現の探求過程を重視し、自分の感情を最もよく表していると感じる作品を選び提出する。また、上限を設けることで制作の進捗が異なる生徒にも対応でき、全員が自分のペースでじっくりと取り組むことができる。これらの取組は、制作を通じた自己実現の達成につながると考える。

(2)「指導技術(授業展開)」の視点から

技法の習得と制作への応用：水墨画の表現に必要な基礎的技法(筆遣い、墨の濃淡、にじみ・かすれの扱いなど)を段階的に学習する。特に「感情の線」を描く練習を通して、墨と感情の関係を体感的に理解できるようにする。学習の流れをスモールステップで構成し、基礎から応用へと自然に移行できるように指導する。

他生徒との交流：制作中、他生徒と交流できるように班体制で制作を行い、表現や技術について学び合えるようにする。そのなかで他者理解、自己理解が進み、さらに制作が深まることをねらう。

(3)「主体的・対話的で深い学び」の視点から

失敗を肯定する環境づくり：何度失敗しても大丈夫のように、制作枚数を多く設定し、間違えても大丈夫という意識をもたせる。このことで、何度も実験ができるため、大胆な表現、自己表現の深化を促す。

対話的な鑑賞活動の充実：制作の途中および完成後に、生徒同士で作品を発表・鑑賞し合う時間を設ける。他者の表現のよさや工夫を認め合い、感じたことを言葉にして共有することで、水墨画や抽象表現への理解を深めるとともに、自己の表現を見直す視点を育てる。

“座る”を考える ―私たちの日常をデザインする―

A 表現(1)イ(ウ)、(2)ア(ア)(イ) B 鑑賞(1)ア(イ) 共通事項 (1)ア、イ

〔対 象〕 板橋区立高島第一中学校 3 年 3 組(30 人)

〔授業者〕 教諭 松橋 康憲

1 題材の概要と、大会テーマ、分科会テーマとの関連

私たちは、あまりにも当たり前すぎる「座る」という行為を、普段意識していない。本課題では、このありふれた行為を掘り下げ、体験やリサーチを通して、マケットとして「座るもの」をデザインする。この経験は、生徒が自身の生活を豊かにするための計画を立てることと向き合うきっかけになると考える。

「分科会テーマ「わたしたちを理解するために」

本題材では、「座るもの」をデザインするという行為は、単に使いやすいものをつくるだけでなく、「私たち」が「座る」をどう考え、どう社会と関わっているのかを深く探求することにつながる。美術を学ぶことは、目に見えない文化的な背景や、無意識の行動様式を、感性を通じて捉え、形として表現する力を育むことである。意識的に「座る」体験や「座るもの」のデザイン、プレゼンテーションという具体的な活動を通して、目に見えない感情や文化的な背景を捉え、それを他者と共有する力を養う。「私たち」という存在を深く理解し、世界を豊かに生きるための重要な手段となり得る。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① 素材の特性・形状・色彩・使用方法が感情に及ぼす効果を、自分の体験と関連付け理解する。

技 ② 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求し創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表す。

イ「思考力・判断力・表現力等」に関する目標

発 ① 使用場所・条件・使用者のことを考え主題を生み出し、機能性や美しさ価値などを多角的視点から総合的に考え、独創性豊かに表現の構想を練る。

鑑 ② 用途や在り方の追求から生まれる美を感じ取り、作者の表現意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を深める。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

態表 ① 美術の創造活動の喜びを味わい、対象について思考を深め、材料や色彩、形状を楽しみながら創意工夫し、主体的に表現する学習活動に取り組もうとする。

態鑑 ② 美術の創造活動の喜びを味わい、デザイナーや制作者の作品鑑賞会、制作者との意見交換などを行い、表現の意図と創意工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に主体的に取り組む。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
①素材の特性・形状・色彩・使用方法が感情に及ぼす効果を、自分の体験と関連付け理解している。 ②材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求し創意工夫して、制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって創造的に表わしている。	①使用場所・条件・使用者のことを考え主題を生み出し、機能性や美しさ価値などを多角的視点から総合的に考え、独創性豊かに表現の構想を練っている。 ②用途や在り方の追求から生まれる美を感じ取り、作者の表現意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めている。	①美術の創造活動の喜びを味わい、対象について思考を深め、材料や色彩、形状を楽しみながら創意工夫し、見通しをもって主体的に表現する学習活動に取り組もうとしている。 ②美術の創造活動の喜びを味わい、デザイナーや作者の作品鑑賞会、作者との意見交換などを行い、表現の意図と創意工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に主体的に取り組もうとしている。

3 指導観

(1)題材観

学習指導要領の目標にある「造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。」を受けて本題材を設定した。

私たちは古くから、日常的に様々な場所やものに座ってきた。冷たい雪の上や熱いアスファルト、チクチクする草、安心できる膝の上など、座る対象や座り方によって私たちの感じ方や体験は大きく変わる。

「座る」という粗大運動の一つをテーマに、座るものを自分たちで作る過程を通して、身体や生活、そして私たち自身について理解を深める。特に、座るものの造形的な成立条件や素材・形状による身体感覚、使い方や気持ちの変化に注目し、素材選びについて考えていく。

座る行為を観察・分析する体験学習や、自分の生活経験を振り返ることで、座る“もの”や“こと”、あるいは“形”の中にある機能や美しさを考え、主題を見出して作品の構想を練る。これにより、デザインへの見方を深めることを目指す。

さらに、椅子を使う人の動きや快適さを考慮し、機能性と美しさを両立させるデザインの重要性を学ぶ。

作品制作への関心から表現方法の創意工夫へと主体的な活動を促し、アイデアを形にする創造的思考を育てる。使う人を想像しながら創作することで、豊かな生活を創造する情操の基盤も培う。

また、大人になる過程では消費する立場から多様な生産活動へと役割が広がるため、中学生はまさに成長の只中にあり、デザインを通じて自身や生活、社会の営みを見つめ直すことは、発達や自己理解を促進する良い機会となる。

(2)生徒観

本校の3学年は、グラフィックデザインや、立体、自画像、デッサンなど様々なジャンルの課題に取り組んできている。

しかし、プロダクトデザインの課題は初めてであることに加え、生徒の中には自分の発想に自信がもてないため制作が進まない場合がある。その為、発想の手助けとなる体験学習と感じたことや考えを共有することができる共同学習を取り入れた。

授業への取り組み方に幅のある学年であるが、授業中の質疑や作品の構想では、瞬発力のある着想ができていない生徒も多い。しかし、デザインの背後にある「機能的な必然性」や「社会的な役割」まで深掘りして考えようとする意識はまだ低い。「なぜその形なのか」「誰のために、何のために作るのか」という問いを椅子のデザイン過程において指導することでデザインへの探究心を深められると考える。

(3)教材観

“座る”を多角的に考察するために、体験学習・リサーチ・制作・プレゼンテーションという一連の流れを大切にしたい。また、個性豊かな生徒の得意なことが生かせるように、文章・絵・立体と表現ジャンルを複数設けることや、身近で基本的な動作を課題にすることで、取り組みやすく深掘りできる課題を目指している。例えば、『いろいろな素材や形に“座る”』という活動では座ることのできるものが全て教材となる。生徒がのびのびと様々な物に座ったり、哲学的に考えたりすることをねらいとしている。

3年間の集大成としての課題の為、今まで学習してきた知識技術を基礎に取り組ませる。表現の方向性は各自で定める。マケット制作では、美術室にあるものは全て使用可とする。材料は持ち寄り、自分自身で制作工程を考えたり創意工夫したりすることで、作品に愛着をもてることや、家庭とのつながりも制作活動の一部とすることで、美術が日常生活に根付くことも狙いとした。

また、3年生として、自ら制作したものと社会とのつながりを考えるきっかけとなるように、端末を使いプレゼンボードを制作することで、生活の中の美術の役割について学習を深める。

4 材料・用具

指導者：美術室にあるすべての道具と材料、様々な種類の椅子、ワークシート(素材リサーチ用)(コンセプトシート・アイデアスケッチ用)(レポート用)、糊付きパネル、カラー画用紙、画用紙、スライド、ポスター(ヴァイトラの名作チェア)などの視覚的に支援できるもの、参考作品
生徒：教科書、資料集、筆記用具、アクリル絵具、タブレット端末、制作に必要な材料と道具

5 指導計画と評価計画(全 15 時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1	(今後に座るものを制作することを見越し) 素材や形によって生まれる座り心地の違いを体感する。また、体感することによって、自分の経験や記憶を再確認する。座ることで景色が変わることに気がつく。素材や形の特性について、実体験が伴ったリサーチをする。	座ってみよう！ ・屋内・屋外・日陰・日向などの条件が違う校内の様々な場所に赴き、いろいろ素材や形のものに座る。 ・立ったり座ったりする。 ・様々な素材の特徴(触り心地・伝熱性・蓄熱性など)を、リサーチしてワークシートにまとめる。 ・友人と「座ること」について意見交換し、他者の「座る」について知る。	ア-① イ-① ウ-①
2	ソファや車椅子などの椅子の種類やデザインの特徴について知る。 椅子の用途を考えて、意識的に椅子に座る体験をする。	マイ フェイバリット ワン！ 自分なりの「座る」を発想する。 ・様々な椅子に座り、違いを確認する。 ・任意で一つの椅子を選び、その椅子及び椅子の種類について調べ、レポートにまとめる。スライドを見て、デザイナーズチェアのデザインと技術革新及び時代背景によるデザインの変化について学ぶ。	ア-③ イ-② ウ-②
3 4	自分の生活と作品制作を関連付けて作品のイメージを膨らませる。 椅子の使用場所や使用者、使われる目的を考えて素材・色・形状などのデザインの構想を練ることができる。	座るもののコンセプトを考えよう！ 使う人や場面を想定した自分なりの「座る」、「自分が形にしたい“座る”」を発想する。 ・リサーチ(ワークシート)やレポートを踏まえ、主題を見つけ、アイデアスケッチを制作する。 ・友人との意見交換を通じて発想を広げる。友人のデザインから学んだことや気付いた点を共有し合う。 ・資料を参考に座り心地と形態の関係を確認する。	ア-① ア-③ イ-② ウ-②
5 6	デザイン画を描くことで、問題点を見つけたり、深く掘り下げたりすることができる。	デザイン画の制作 ・アイデアスケッチを基に、デザイン画を制作する。	ア-② イ-① ウ-①
7 8 11	座るものの機能美や造形的なよさを感じながら、イメージを基に、立体を制作することができる。 デザイン意図に基づき創意工夫を重ねる。 また、友人との意見交換を参考にして自己の解釈を築き、表現を追求することができる。	マケット制作 ・動画や写真、参考作品の鑑賞からマケットの制作について知る。 ・素材を集めマケットを制作する。 ・友人との意見交換を通じて、考えを明確にするなど表現方法を再考する。	ア-① ア-② イ-② ウ-① ウ-②
12 14	作品の魅力が第三者に伝わるプレゼンボードを、デザイン・制作する。	プレゼンボードの制作 ・タブレット端末を使い、プレゼン用のイメージ資料を作る。 ・糊パネルにカラー画用紙、イメージ資料、デザイン画を貼る。	ア-① ウ-①
15	見え方を意識して、美しく展示することができる。 友人の作品から、作者の意図やデザインのよさを感じ取ることができる。	作品鑑賞 ・作品の内容が伝わるようにスマートに展示する。 ・友人の作品を鑑賞する。 ・講評から課題を振り返る。	イ-② ウ-②

6 指導に当たって

(1)「生徒理解」の視点から

視野の広がる指導と自由な発想を大切にする：スライド鑑賞や体験学習を通じて、椅子が単なる「座る道具」ではなく、美しさや機能性、歴史をもつ存在であることを示す。これにより、生徒が椅子に対する固定観念を捨て、多様な視点から物事を捉えるきっかけをつくる。

生徒の生活に還元する：生徒が学習内容を自分事として捉えるために、材料集めやレポート制作を授業時間外でも意識させることで、生徒が日常生活の中で身の回りのものに目を向け、「なぜ？」「誰のため？」と考える力を養う。
異なる視点を取り入れる：友人との交流時間やフィードバックを通じて、自分のアイデアが他者によってどのように捉えられるかを知ること、客観的な視点や多様な価値観を学ぶ。

(2)「指導技術(授業展開)」の視点から

発想を促す環境づくり：美術室にデザイナーズチェアを展示し、また材料・道具が自由に使える環境にすることで、生徒の創造性を刺激し自然とクリエイティブな思考に没入できるようにする。

課題を解決する方法を探る：体験学習やレポート制作で得た気付き(座り心地、安定性など)を、アイデアスケッチを通して解決策を考える活動につなげる。単なる模倣ではない問題解決型のデザイン思考を促す。

マケット制作における指導：固定観念にとらわれない自由な発想を奨励し、奇抜な形や新しい素材に挑戦させ、既成概念を壊すことを促す。

(3)「主体的・対話的で深い学び」の視点から

対話で深める：交流時間を設け、友人や教師との対話を通じてアイデアを深める。これにより、自分の考えを相対化し、新たなインスピレーションを得る。

失敗を肯定する：失敗を学びの一部として捉えさせ、試行錯誤を繰り返しより質の高い作品を目指す主体的な姿勢を育てる。

本質を探究する：デザインを通じて実用的な課題を見つけ、その解決策を考えるプロセス教え、深い学びへと導く。

〈スライド資料の一部〉



〈生徒の作品例〉



あいのかたち ―石彫で表すそれぞれの愛の表現―

A 表現(1)ア(ア)、(2)ア(ア)(イ)、B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

〔対 象〕板橋区立志村第一中学校 3年2組(39人)

〔授業者〕教諭 石井 紗帆

1 題材の概要と大会テーマ、分科会テーマとの関連

本題材は「愛」という目に見えない感情を、滑石を彫る造形活動を通して抽象的に表現するものである。中学3年生が自分自身の内面や人との関りを見つめ直し、自分にとっての「愛」とは何かを考え、抽象的な形で表現することをねらいとしている。

この学びは、美術が人の心や他者とのつながりといった目に見えないものを形にし、自分の内面にあるものを他者と共有する営みであるという「だから美術を学んだ。」という今回の大会テーマにつながる。

また、分科会テーマ「わたしたちを理解するために」として、自己理解と他者理解とも深く関わる。自分の感情を形にする過程で自己理解を深め、他者の考えや作品としての表現を通して、多様な感じ方や価値観に触れることで他者理解へとつながっていく。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① 石の形やその他の材料などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解する。造形的な特徴などを基に、全体のイメージで捉えることを理解する。

技 ② 石やその他の材料など、材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表す。

イ「思考力・判断力・表現力等」に関する目標

発 ① 自身がイメージした愛を深く見つめ、感じ取ったことや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。

鑑 ② 抽象的な表現での立体作品から、造形的な良さや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

態表 ① テーマに基づいて主題を生み出し、彫刻として創造的な工夫をし、心豊かに表現する活動に主体的に取り組もうとする。

態鑑 ② 作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考える活動に主体的に取り組む創造活動の喜びを味わい、鑑賞の活動に取り組もうとする。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
①石の形やその他の材料などの性質やそれらが感情にもたらす効果などを理解している。造形的な特徴などを基に、全体のイメージで捉えることを理解している。 ②石やその他の材料など、材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表している。	①自身がイメージした愛を深く見つめ、感じ取ったことや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 ②抽象的な表現での立体作品から、造形的な良さや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。	① テーマに基づいて主題を生み出し、彫刻として創造的な工夫をし、心豊かに表現する活動に主体的に取り組もうとしている。 ②作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考える活動に主体的に取り組む創造活動の喜びを味わい、鑑賞の活動に取り組もうとしている。

3 指導観

(1)題材観

「愛」は、私たちが日々の暮らしの中で自然に感じ、行動の原動力ともなる大切な感情である。家族や友人とのつながり、誰かを思いやる気持ち、命へのまなざしなど、「愛」は人と人との関係の中で育まれ、時に目に見えないかたちで私たちの存在を支えているものである。

中学3年生という時期は、心も体も大きく成熟し、変化を迎える大切な時期である。将来について考えはじめたり、社会や自分自身の内面と向き合ったりしながら、これまでの価値観を揺り動かし、新たに再構築していく過程にある。そうした時期に「愛」という主題に取り組むことは、生徒自身が見過ごしがちな感情やつながりに目を向け、自分にとって大切なものを見つめ直すきっかけとなる。【自己理解】

また、他者との違いを知り、共に生きていくうえでかかせない多様な価値観への理解にもつながっていく。【他者理解】

そもそも、美術は古代の洞窟壁画から現代アートに至るまで、常に「人間とは何か」「愛とは何か」といった根源的な問いに向き合い、それを形にしてきた営みでもある。目に見えないものに「形」を与え、共有するという行為は、人が他者と共に生きるために生み出してきた表現の力であると考ええる。

本題材では、生徒一人ひとりが「自分にとっての愛とは何か」と問い、滑石を彫るという造形活動を通して、その思いを抽象的な形として表現していく。抽象という表現において、正解のない問いに向き合う姿勢を促し、他者と異なる自分の感性に気付くきっかけにしていきたい。そして、生徒が美術は「人間の根本に向き合う」営みであることに気づき、表現することの意味や価値を主体的に考える姿勢を育んでいきたいと考える。

(2)生徒観

第3学年は制作に対する意欲が高く、クラスで教え合いながら取り組むことができる。第1学年や第2学年で取り組んだ授業を通して材料を自分で選択し、自身の興味、関心や技能に応じて自由に作品制作に臨んだ経験(自己選択型の学習)から、自分で表現に適切な材料を選択し、生かし方を試行錯誤する姿勢が身に付いている。

さらに、第2学年の1学期には、モダンテクニックを用いた授業で、生徒が自分で主題を決め、内面のイメージを表現することに取り組んだ。その際には、具象から抽象へと表現を変化させる方法として「強調」や「単純化」といった手法を学び、抽象表現の考え方や表現の仕方に触れている。

今回は、その学びを踏まえ、平面での抽象表現から一歩進めて、立体による抽象表現に挑戦する。素材の質感や形の選び方を通して、より深く自分の思いを形にする経験へと繋げていきたいと考える。

しかし、第2学年で抽象表現に触れてきたものの、特に立体として抽象的に表現することに難しさを感じている生徒は多く、アイデアが似通った形に偏りやすい傾向が見られる。そのため、本題材では、他者との交流を通してイメージを広げる機会を重視し、アイデアスケッチの段階では対話や傾聴を通して思考を深める時間を十分に確保する。

また、造形的な工夫としては、単純化や強調に加え、「運動性を抽象的に表現する手法」や「形状の導線(見る人の視線の流れ)を用いて表現意図を伝える手法」を学び、あらゆる視点を組み合わせて、自身の主題に適した抽象表現を導き出せるようにしていく。

(3)教材観

本題材では、彫刻の素材として雲南石を使用する。雲南石は柔らかく加工がしやすいため、中学生にも扱いやすい素材である。ヤスリや印刀で形を整えた後、目の細かい耐水ペーパーや布で磨くことで、美しい光沢や滑らかな質感を得ることができる。仕上げとして磨くかどうかは生徒自身の表現意図によって選択するよう指示している。

このような雲南石の性質は、「愛」という抽象的かつ個人的な主題を形にするうえで適している。例えば、磨き上げられた表面からは温かさや柔らかさなどの印象を引き出すことができ、逆に彫り跡を残したままの荒々しい表面は、感情の揺らぎや未整理な思いを象徴的に表すことができる。また、鋭利な角や冷たく硬質な感触を活かすことで、孤独や距離感といった繊細で複雑な側面も表現できる可能性がある。

作品の大きさや構成や形態については、生徒の創造性を尊重し、自由度を高く設定する。ひとつの塊として彫刻するだけでなく、石をあえて砕いたり、複数のパーツに分けて組み合わせるような構成も可能である。表面の装飾については、石の素材感を重視するため着色は行わないが、石の素材感を主とした構成であれば、ビー玉やビーズなどの異素材を作品の一部に取り入れることも可能とする。

さらに、石という素材がもつ物理的な「重み」や「壊れやすさ」も、この題材の主題と密接に結び付く。「愛」の重さや存在感を実感として感じさせると同時に、もろく繊細な石の扱いを通して、「丁寧に向き合うこと」や「大切に扱うこと」の重要性を体験的に理解することができる。こうした素材との関わりは、作品への愛着を育むとともに、「愛を大切にすること」という主題の本質に迫る手がかりとなる。

4 材料・用具

指導者：タブレット端末、ワークシート、トレーシングペーパー、カーボン紙、金工ノコギリ、鬼目ヤスリ、彫刻ヤスリ(丸)、印刀、ニードル、篆刻バイス、トレー、新聞紙、布(ウエス)、耐水ペーパー(#400、#800、#1000)

生徒：日本文教出版教科書(下)、資料集(東京都版 感じる表す美術)、タブレット端末、筆記用具、ジャージ(汚れ防止)

<導入の鑑賞ワークシート>

1. 資料集 P19 記載の生徒作品「祈り」を鑑賞し、抽象表現の要素の工夫などを話し合う。

2. 「祈り」をテーマに、鑑賞図(生徒作品)として自分なりに表現してみよう。鑑賞図の描き方を参考に、自分の作品を描いてみよう。

3. 鑑賞図(生徒作品)を鑑賞し、自分の作品と比べて、自分の作品の工夫を話し合う。

<表現ワークシート>

1. 「祈り」をテーマに、自分の作品を描いてみよう。

2. 鑑賞図(生徒作品)を鑑賞し、自分の作品と比べて、自分の作品の工夫を話し合う。

3. 鑑賞図(生徒作品)を鑑賞し、自分の作品と比べて、自分の作品の工夫を話し合う。

<石の展開図ワークシート>

石の展開図の描き方を参考に、自分の作品を描いてみよう。



実際の石を見ながら、制作手順やポイントを確認する

5 指導計画と評価計画(全13時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1 2	・抽象表現について理解する。 ・作品を鑑賞し、造形的な特徴からイメージを膨らませたり、同じテーマを自分なりに表現してみる。	・抽象表現について理解する。 ・日本文教出版美術教科書(下)P19 記載の生徒作品「祈り」を鑑賞し、抽象表現から受ける印象を理解する。また、抽象表現で表す練習をする。	ア-① イ-② ウ-①
3 4	・授業の主題から自分なりの主題を考え見出し、作品のイメージを膨らませる。	・「愛」から個人的なエピソードを基に自分の「愛」の主題を考え見出す。 ・石を受け取る。 ・石に触れながら、自分の主題を基に作品のアイデアスケッチをする。 ・主題を抽象的な形で表現する方法として、具体的な形を単純化や強調する方法や、運動性を抽象的に表現する手法、形状の導線(見る人の視線の流れ)を用いて表現意図を伝える手法があることを学ぶ。 ・アイデアスケッチを石の展開図に描く。	ア-① イ-① ウ-①
5 6	・アイデアスケッチを基に雲南石に下描きをする。 ・金工ノコギリや鬼目ヤスリを用いて、形を荒削りする。	・トレーシングペーパーやカーボン紙を用いて、展開図に描いた形を雲南石に転写する。 ・金工ノコギリや鬼目ヤスリを用いて、荒削りする。	ア-② ウ-① ウ-②
7 8 9	・鬼目ヤスリや印刀、ニードルを用いて、形を中彫りする。	・鬼目ヤスリや印刀、ニードルを用いて、形を中彫りする。	ア-② ウ-① ウ-②
10 11 12	・耐水ペーパーや布を用いて、表面の仕上げをする。 ・自分の主題を基にして名札を書く。	・耐水ペーパーや布を用いて、表面の仕上げをする。 ・自分の主題を振り返り、名札の内容を書く。名札用の台紙を制作する。(台紙の表現は自由とし、それぞれ自分の作品に適した台紙を作成する。装飾せずシンプルな状態でも良いとする。)	ア-② ウ-① ウ-②

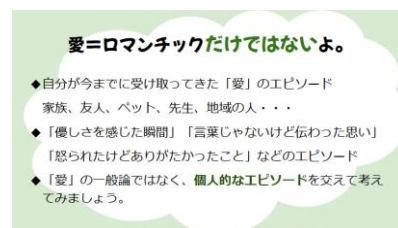
13	・制作活動を振り返り、完成した「愛のかたち」を相互鑑賞する。	・生徒作品を鑑賞し、各の作品について語り合う活動を通して作品の意図を感じ取り、「愛」についての理解を深める。	イ-② ウ-①
----	--------------------------------	--	------------

6 指導に当たって

(1)主題への理解を深めるにあたって

・本題材の主題である「愛」から連想しやすい愛の種類は「恋愛」であるが、生徒には、「友愛」「家族愛」「自己愛」「慈愛」などの日常生活の中で頻繁に登場しながらも、その意味や形について深く考える機会は限られている愛に目を向けさせる。個人の主題を考える際には、その多様な側面に気づくことができるよう、様々な愛の視点をスライドで示し、それを踏まえた個人のエピソードについて他者との語りや傾聴、figma を用いたクラス全体での意見交換を通して、主題について思考を広げたり深めたりしていけるよう促す。

<主題についてのスライド>



<figma での意見共有>



・愛の持つ肯定的なイメージだけに限らず、「受け取る愛」「与える愛」「求める愛」「すれ違う愛」など、様々な「愛のかたち」があることを意識させ、「愛」を幅広く捉えながら考えさせる。

・主題を共有する際に、「愛」とは非常に繊細な主題であること、様々な捉え方があることを全体で共通理解し、刺激的な言葉や人を傷つける可能性のある言葉の表現は避けるなど、誰かにとって不快な思いにならないよう配慮させる。

(2)抽象表現への理解を深めるにあたって

・個人の作品へと入る前に、導入の鑑賞で教科書掲載の生徒作品「祈り」を鑑賞し、表現の特徴を捉えて作者の意図を想像したり、同じ主題を自分なりに抽象的に表現する活動を通して、立体作品での抽象表現について考えさせる。その際に、意図を表現するうえで「造形的な特徴」だけでなく「素材感」に注目させ、これから自分たちが表現する石の持つ素材感を作品に活かせるよう意識をもたせる。

(3)アイディアスケッチと制作にあたって

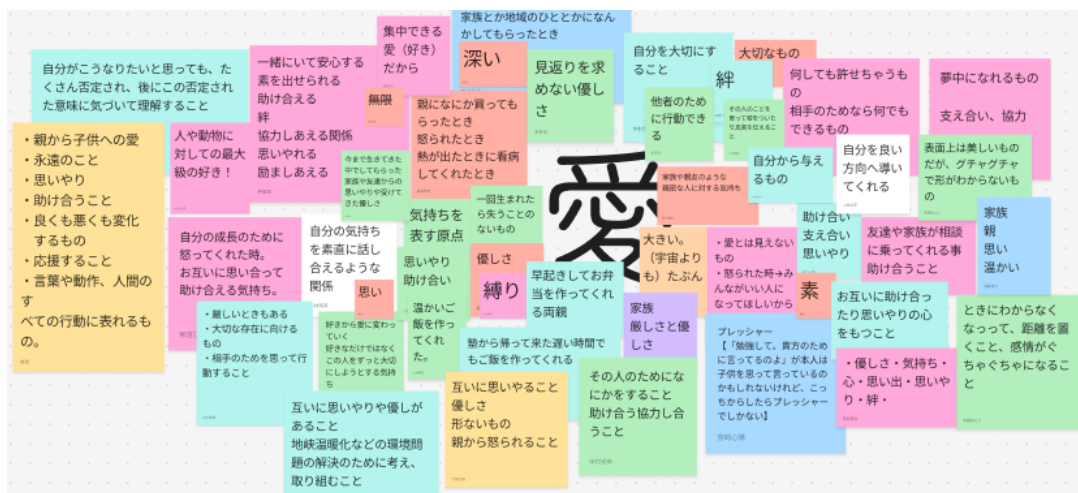
・アイディアスケッチの段階においては、「愛＝ハート」という図像的なイメージが生徒にとって最も連想しやすいものである。しかし、本題材では表現の幅を広げることを目的としているため、ハートのモチーフの使用は避けるようあらかじめ指導する。

<アイディアスケッチの様子>



・彫刻は塑像と違い、減らして作るという造形技術が必要な造形である。そのため、最初に形をしっかり構想しないと途中での修正が難しい。形を考える際には、そうした石彫という教材の特性を踏まえ、繊細な装飾や複雑な形状は作業時間や石の耐久性の面から実現が難しいことを伝える。そのうえで、構造的に無理のない、シンプルで力強い形を追求するよう指導する。

<クラスで共有したもの>



〇〇なみかん

—色彩学習を活用した立体作品制作—

A 表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)、B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

[対 象] 北区立十条富士見中学校 1 学年(1 年 1～3 組各 38～39 人)

[授業者] 教諭 神戸神奈

1 題材の概要と、大会テーマ、分科会テーマとの関連

本題材は、タブレット端末を用いて二次元(平面)から三次元へ形を立体的に表し、みかんの特徴を自分なりに考えて表現する授業である。4 月第一回授業『身の回りを描く』では、鉛筆で自分の手や文房具を観察し、観察力を高め、感じたものを平面に写す活動に取り組んだ。その後、色彩学習『色の三原色』や『混色』などの色彩学習で得た知識を生かし、『〇〇なみかん』という主題を生み出し、平面から立体作品へと発展させる活動を行う。発想や構想する力を伸ばす。平面から立体に表す過程で『見た目』だけではなく『構造』や『質感』をより深く理解できる。さらに、クラスメイトの参考作品を見たり、タブレット端末や写真資料をもとに『自分がイメージするみかん』を再現したりしていくことで、発想力や構想力を育み、観察力と理解力の定着を目指す。

生徒たちにとって小学校で学んだ『図画工作』と中学校で学ぶ『美術』では、入学してまもない生徒たちにとって「苦手」「不安」を感じる生徒がいると考える。そこで授業を通して、いかに生徒の達成感や自己肯定感を身につけさせていけるか、教師は生徒たちの発達段階に応じた題材選びや授業づくりが必要不可欠である。

生徒は、参考作品や写真資料をもとに『自分がイメージするみかん』を再現する。中学校入学直後の生徒にとって、美術は小学校の図画工作とは異なる新しい学びであり、不安や苦手意識をもつ生徒も少なくない。そこで、本題材では『できるかな』→『やってみよう』→『できた！』という成功体験を積み重ねられるよう、教師が明確な支援を行う。大会テーマ『だから美術を学んだ。』に基づき、制作活動を通して達成感と自己肯定感を育てることを重視する。1 年次では創造の楽しさを体験し、2 年次の『機能性を考えた造形』に取り組み、3 学年では『躍動感のある造形』へとつなげていく。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① 形や色彩、材料などの性質や対象、事象を捉える造形的な視点について理解している。

技 ② 材料の特性を理解し、用具の正しい使用法を身につけ意図に応じて表現方法を工夫して表すことができる。

イ「思考力・判断力・表現力等」に関する目標

発 ① みかんを観察し感じ取った形や色彩の美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。

鑑 ② 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者が作品に込めた意図やねらい、表現の工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

態表 ① 美術の創造活動の喜びを味わい、『〇〇なみかん』の主題を基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の活動に取り組もうとしている。

態鑑 ② 美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
①形や色彩、材料などの性質や対象、事象を捉える造形的な視点について理解している。 ②材料の特性を理解し、用具の正しい使用法を身につけ意図に応じて表現方法を工夫して表すことができるようにする。	①みかんを観察し感じ取った形や色彩の美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。 ②造形的なよさや美しさを感じ取り、作者が作品に込めた意図やねらい、表現の工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。	①美術の創造活動の喜びを味わい、『〇〇なみかん』の主題を基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の活動に取り組もうとしている。 ②美術の創造活動の喜びを味わい、楽しく造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

3 指導観

(1)題材観

本題材は、色の三原色、混色など知識を生かし、前単元で取り組んでいた絵の具を使用した活動を発展させるものである。感じ取ったことや考えたことなどを基に、みかんの特徴や美しさを立体作品で表現する活動を通して、今まで学習した色彩の知識を活用する。美術の創造活動の喜びを味わい、楽しくみかんの特徴や美しさなどを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表現活動する力を育てることをねらいとしている。

立体品制作では、果物のみかんを選択した理由は長年扱われている題材であり、色彩学習の成果を生かした表現ができるためである。みかんは熟すまでに青いみかんから枝付きみかんにカビが生えたみかんなど、様々な色のイメージをつつことができると考える。生徒たちには、スライドを用いて様々なみかんの可能性があることを説明する。材料や用具の生かし方身につけ、意図に応じて工夫して表すことができるよう生徒たちの多様な表現を支援していく姿勢で指導を行う。

新たな切り口として『見て理解する』(平面)から『体験を通して理解する』(立体)ことを大切に本授業に臨みたい。平面表現では『目で見て写す』ことが中心だが立体では『体感しながら形をつくる』ことになる。想像力を膨らませて、美術的な感覚を養いたい。

(2)生徒観

多くの生徒は美術の授業に対して興味をもち、制作活動を楽しんでいるが、一部には絵の具の扱いに苦手意識をもつ生徒が見られる。また、作業進度に個人差があるため、共通の目標や見通しをもって取り組めるようにすることが課題である。

本題材では、身近な果物を題材とすることでイメージをつかみやすくし、作業工程を明確に示して主体的な取り組みを促す。自ら試行覚悟しながら完成を目指す中で、造形の楽しさと達成感を味わえる授業展開を図る。

(3)教材観

今回使用する粘土の特徴は、モデライトノヴァという軽量かつあらかじめ三原色に着色されているものを使用する。混色する粘土の分量を調整することで、色の変化する様子が視覚化できる。色と形を一体として感じ、手で考えることで『混色』『丸める』『伸ばす』など、みかんをつくる工程には、基本的な技法を学習することができる。第一回目の授業では、導入として、みかんの色は一色ではなく、みかんが熟すまでの様々な色があることを話す。表現道具には、粘土へら(1本)クリアファイルなどを活用する。毎時間の授業の終わりに振り返りではスクールタクトを使用して記録をしていく。継続して記録することで、生徒の自己の振り返りが容易で、クラス全体で作品の共有できる。

4 材料・用具

指導者：タブレット端末、実物投影機、粘土、粘土板、粘土へら、小皿、歯ブラシ、新聞紙、クリアファイル

生徒：筆記用具、タブレット端末、振り返りプリント

5 指導計画と評価計画(全8時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1	学習内容を理解する。 ・主題を生み出す。 ・テーマを決める。 ○○なみかん	①みかんにはどのような色合いがあるか、色彩学習の復習をする。今回の単元での粘土の扱い方、みかんの作り方をスライドを使用して確認する。水の加え方、粘土の特性を学習し作品制作に取り組む。テーマは『○○なみかん』とし、どのようなみかんをつくるか 粘土を使用して自分のみかんのイメージを表現する構想を練る。タブレット端末を活用し色合いや皮の剥き方など構想を練る。 作品の記録をスクールタクトに入力する。 <div data-bbox="582 519 938 730" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="957 519 1302 730" data-label="Image"> </div>	アー① イー①
2	自分のイメージするみかんのあらづくりをする。 ・果肉、皮などの質感の違いを考える。	②新聞紙を芯材とし、粘土で新聞紙を包む。混色した粘土を丸めて果肉の凹凸を作る。へらや歯ブラシなど様々な道具の使い方を学ぶ。クリアファイルを使用して粘土を伸ばす。 みかんは必ず果肉と、皮がある状態とし、質感の違いをスクールタクトにて進捗を記録する。 <div data-bbox="608 931 1007 1178" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1038 943 1238 1137" data-label="Image"> </div>	アー① アー②
3	自分のイメージするみかんの質感表現に取り組む。 ・へらや歯ブラシを効果的に使う	③へらや歯ブラシなどを使用して、よりみかんの質感に近づける。歯ブラシの効果的な使い方、白い筋の表現方法を活用するスクールタクトに作品の記録を入力する。 <div data-bbox="582 1301 959 1536" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="975 1301 1302 1536" data-label="Image"> </div>	アイ
4 5	自分のイメージするみかんの質感表現に取り組む、仕上げる	④白い筋の表現方法を学ぶ。粘土の水分量の調整方法を活かす。 ⑤様々な道具や方法を活かして、よりみかんの質感に近づけていく。スクールタクトに作品の進捗を入力する。 <div data-bbox="799 1682 1126 1917" data-label="Image"> </div>	アー①
6 7	絵の具やニスで仕上げる。名札をつくる。⑥⑦	⑥⑦絵の具で着色する際は、粘土が乾いた状態で行う。ニス塗りは果肉部分など、効果的な質感表現を目指す。 名札を作成し、完成作品をスクールタクトに振り返りを入力する。相互鑑賞に準備に向けて予備の時間を設定。	アー① イー①

8	作品完成	⑧相互鑑賞。 お互いの作品から感じ取ったことを、ふせんに記入してを貼り鑑賞する。作品に対して今後の制作につなげられるよう作品の見方を学ぶ。	ウー①
---	------	--	-----

6 指導にあたって

(1)生徒理解の視点から

美術に苦手意識をもつ生徒の支援は、短期的な結果を求めず、長期的な成長を見据えて継続的に取り組む姿勢が重要である。生徒一人ひとりのペースや興味を尊重し、成功体験を積み重ねられるよう指導を工夫する。作品が早めに作品が完成した生徒には、より質感表現を追求したり、自分が決めた主題にそって工夫できるように次の課題を提示したりして、活動を深化させることで学びの充実を図る。生徒同士の助言や意見交換を促し、互いに学び合う雰囲気育てることも大切である。有意義な授業になるよう指導していく。

(2)『指導技術(授業展開)』の視点から

全 8 時間を想定している。生徒によっては早く作品を仕上げる場合や質感の表現に悩む場合も想定される。その際には、他者の作品紹介をして『気づき』の視点を与え、自分の作品を見直す契機とする。また、ICT(タブレット端末など)を活用し、果物の写真や実物を参考にしながら、みかんの色や質感を多角的に観察できるようにする。インターネットの検索を通して色や形の多様性に気づかせ、表現への発想を広げる。

題材で『みかん』を選定した理由は、生徒にとって親しみがあり、造形学習や色彩表現の導入に適しているためである。みかんは熟すまでに、青いみかんから枝付き・葉っぱ付きのもの、あるいは表面に変化のあるものなど、多様な表現が可能である。これにより、生徒の個性や創造性を尊重しながら、色彩の活用力と造形的発想力を育てることができる。

授業導入では、スライドを用いて多様なみかんの姿を提示し、視覚的なイメージを喚起する。制作の見通しもたせることで、生徒が主体的に制作へ取り組めるよう工夫する。

鑑賞授業では、互いの作品を尊重し合う場を設け、作者の思いを共有できるようにする。相互鑑賞の際、名札には、『〇〇なみかん』など作者が設定した主題やテーマを記す工夫を取り入れ、表現意図を伝える力を育む。互いの良さを認め合うことで、自己肯定感の向上と創造活動への意欲の継続を目指す。

完成作品



象徴から読み解く鑑賞

ーフリーダ・カーロ《いばらの首飾りとハチドリ》の自画像からー

〔対 象〕 豊島区立千登世橋中学校 3年B組(32人)

〔授業者〕 教諭 河内なつ

B 鑑賞(1)ア(ア)、共通事項(1)ア、イ

1 題材の概要と、大会テーマ、分科会テーマとの関連

本題材は、感じ取ったことや考えたことなどを基にした鑑賞の学習活動を通して見方や感じ方を深めるものである。フリーダ・カーロ《いばらの首飾りとハチドリ》(1940 年)を鑑賞し、象徴的に用いられたモチーフや出来事との関係を読み解く中で、作者の心情や自己表現の在り方を探ることをねらいとする。

美術教育の意義は、表現活動や鑑賞活動を通して感じ取ったことや考えたことをもとに、自分の見方や感じ方を深め、創造的に考え表現する力を育てることにある。美術の作品には、何を表したいのかが明快でないものもあり、そういった作品を前にして「分からない」と感じ、忌避してしまう生徒も少なくない。しかし、一見して分からなくても、造形的な特徴や表現の意図に注目し、情報や体験を通して多様な見方に触れることで、多くの生徒が作品に興味をもち、考えるきっかけをつかむことができる。そのような体験を通して、生徒は自分の感じ方や考え方が深まることを実感する。このような学びを通して、感性や思考を豊かにし、新たな価値を見いだす力を身に付けさせたい。

生徒が自分の創造力に自信をもてるようにするために、学習の中で自分なりの理解や気づきを得たことを実感できる「できた」と感じられる場面を多く設け、感じ方や考え方の深まりを自覚できる体験を行う。そのために、象徴的に用いられているモチーフの造形的な特徴や意味に着目し、イメージから作品の本質的な理解へと段階的に考えを深める活動を行う。さらに、Which 型課題を用いることで複数の選択肢を比較・検討し、自己選択することにより生徒自身が主体的に作品理解への方向性を決定できるようにしていく。また、選択の根拠を言語化し他者に伝え共有することは、論理的思考力の育成にもつながると考える。

- ・「描かれているのはどんな人かを考える」場面で、作品を鑑賞し感じたことをオクリンクのカードで表現する。
- ・「描かれているモチーフを確認する」場面で、作品に描かれている要素を分析し他者と共有する。
- ・「ハチドリの象徴的な意味を考える」場面で、自分なりの仮説と根拠をもって解釈を他者に伝える。
- ・「描かれているのはどんな人かをもう一度考える」場面で、初めの考えと比べて自分の見方の深まりを自覚する。

以上のことなどが、「できた」の実感となると考える。これらの学びの積み重ねは、作品に対する見方の深まりにつながるだけでなく、次時の自画像制作において自分をどのように表すかを構想する発想の場面にもつながっている。

2 目標と評価

(1)題材の目標

ア「知識及び技能」に関する目標

知 ① モチーフや色彩、それらの構成などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、対象を全体のイメージで捉えることを理解する。

イ「思考力・判断力・表現力等」に関する目標

鑑 ① フリーダ・カーロの自画像の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を深める。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

態鑑 ① 主体的に美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、鑑賞の活動に取り組もうとする。

(2)題材の評価規準

ア「知識及び技能」	イ「思考・判断・表現」	ウ「主体的に学習に取り組む態度」
① モチーフや色彩、それらの構成などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、対象を全体のイメージで捉えることを理解している。	①フリーダ・カーロの自画像の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めている。	①美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

3 指導観

(1) 題材観

感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現に関する鑑賞の活動を通して、見方や感じ方を深める題材である。自画像制作の導入として位置づけており、象徴としてのモチーフと作者が表現したい作者自身や出来事との関係を丁寧に読み解くことが、生徒自身の自画像の構想に役立つと考える。

前時は自分の年表を作る自己分析の授業を行い、「どんな自分を表現したいのか？」を考えさせておく。本時の後は、モチーフや背景を象徴的に用いて自分を表現する創作物として、顔はめパネルを制作する。顔はめパネルとすることで、写実的描写が苦手な生徒や自分の容姿に自信をもてない生徒でも取り組みやすく、《いばらの首飾りとハチドリ》の自画像の仕組みも活用しやすいと考えられる。

(2) 生徒観

本題材を学習する3年生は、1年次ではアンドリュー・ワイエス《クリスティーナの世界》を題材として、絵画から物語を想像する活動を行い、視覚的情報から感情や出来事を想像する方法を学んでいる。さらに、3年1学期にはピカソ《ゲルニカ》を鑑賞し、抽象表現や象徴的なモチーフが作者の意図に基づいて選択されていることを理解している。

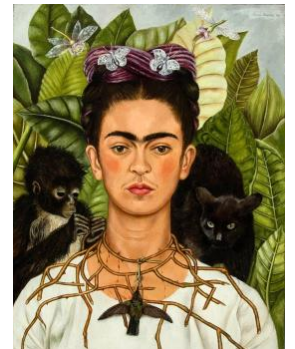
いずれの場合でも、モチーフをそのものとして認識することに留まり、モチーフを象徴的なものとして捉えたり、その構造と主題との関係からより深い解釈を導き出すことが困難な生徒が多かった。それにより、解釈が表層的なものにとどまり、「馬が苦しんでいて、悲惨さを描いていると思う」のように無難な答えをなぞるような記述が目立った。つまり、自分としての価値を見出している、といえるような深い解釈に至ることが難しい状況であった。

ゲルニカの鑑賞が深まらなかった原因として、歴史的背景(スペイン内戦、世界の情勢、美術史)や象徴に関する文化的な背景(闘牛、宗教、神話)、ピカソ個人の背景(政治的な立場、人生経験、人間関係、葛藤)などの知識の不足が考えられる。知識の裏付けがないせいで、自分の仮説に自信がもてず、深い解釈に繋げることができなかったのではないだろうか。

(3) 教材観

生徒が自分の創造力に自信をもてるようにするために、「できた!」と感じられる場面を多く設け、自身を感じる変化を認識できるような体験をつくる。特に、《ゲルニカ》での学びを踏まえ、知識情報を提示するタイミングを工夫し、理解を支えながら主体的な読みを促す。授業を通して、一つ一つの構成要素に象徴的な意味が込められていて読み解きが段階的にできること、作者の制作の動機や背景が情報として残っており、その知識が解釈の深まりに役立つことが鑑賞する作品に必要な要素であることを伝えていく。

フリーダ・カーロはメキシコの女性画家である。事故によるケガや夫との関わりで感じたことを、数百点もの自画像として表現した。《いばらの首飾りとハチドリ》(右図)はその一つで、1940年、夫のディエゴ・リベラと離婚した年に描かれたものである。



表情は静かな印象を与えるが、茨、サル、ハチドリ、猫、背景の生い茂った葉などの多くのモチーフが描かれており、それらに注目し、時代背景や文化的文脈を考慮することで、彼女は胸に秘めた思いを想像することができる。まさに、鑑賞のプロセスを通して見方の変化を実感できる作品であることから、この作品を選んだ。

4 材料・用具

指導者: テレビ、ワークシート、拡大印刷した《いばらの首飾りとハチドリ》の自画像、タブレット端末、ミライシード

生徒: 筆記用具、タブレット端末、ミライシード

5 指導計画と評価計画(全 1 時間)

時間	学習のねらい	活動内容	評価
1	<p>象徴としてモチーフを読み解く視点を以て、自画像の作者がどんな人か？を考える。</p>     	<p>1. 本時が自画像制作の導入であることを確認する。</p> <p>2. 描かれているのはどんな人かを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品は自画像であることを知る。 ・写真を見て、作者について知る。 ・メキシコにルーツをもつ画家であること ・ひげや眉毛をあえて強調していること ・髪を編み上げ、伝統的な衣装を着ていたこと ・第一印象として、どんな人だと思うかをオクリンクプラスのカードに記入し、みんなのボードに送る。 <p>3. 描かれているモチーフを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表情からは感情を読み取るのが難しいことを確認する。 ・顔以外の要素を、オクリンクプラスのカードに単語で記入し、みんなのボードに送る。 ・集計機能で作ったワードクラウドと、拡大画像を見比べながら、描かれている要素を全体で共有する。 <p>4. ハチドリ象徴的な意味を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品が描かれた 1939 年に夫と別れたことを知る。 ・ハチドリはペットではないことから何らかの象徴である可能性があることを確認する。 ・ハチドリが動いている動画(ハチドリの産む卵を運ぶ「ナショジョ」)を見る。 ・ハチドリについて感じたイメージや他に知っていることを話す。 ・なぜハチドリを描いたのかを考え、4 つの中から選ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> A 自分と似た存在として描いた B 自分のあこがれの存在として描いた C 苦しい状況を伝えるために描いた D その他 ・根拠となる情報として、以下を参照する。 ・フリーダ・カーロとディエゴ・リベラが並び、フリーダが小柄な様子が分かる写真 ・眉毛をハチドリに見立てて描いた《マルテ・R・ゴメスに捧げる自画像》 ・フリーダがバスの事故で重傷を負ったこと ・メキシコに伝わるアステカ神話ではハチドリは太陽神・軍神・狩猟神であるウィツィオボチトリであること。 ・ハチドリが現代メキシコで愛と幸運のシンボルであること。 ・オクリンクプラスの選択肢機能を使い、カードに自分の意見とその理由を書く。 ・それぞれの立場の根拠を共有する。 <p>5. 描かれているのはどんな人か？をもう一度考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第一印象と比べ、「どんな人か？について」自分の考えがどう変わったかをオクリンクプラスのカードに記入し、提出 BOX に出す。 <p>6. 自分ならどんなモチーフを描くか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのようなモチーフにするか、ワークシートに記入する。 	<p>アー① イー① ウー①</p>

6 指導に当たって

(1)「生徒理解」の視点から

本題材を扱う中学3年生は、自己と他者の関係や、内面の不安定さ、揺れ動く感情と向き合う時期にある。フリーダ・カーロの自画像の鑑賞を通して、個人的な経験や感情を視覚的に象徴化する方法に触れることで、生徒は「自分らしさ」や「表現することの意味」について考える機会を得る。特に、感情をそのまま描くのではなく、何かに託して描く方法に注目させることで、直接的な表現に抵抗のある生徒でも、表現するためのヒントを得やすくなる。また、背景やモチーフを手がかりに人物像を読み解く活動は、造形的な見方だけでなく、共感的理解や他者理解の育成にもつながる。

(2)「指導技術(授業展開)」の視点から

本授業では、作品全体ではなく、モチーフなどの部分から作品を読み解くプロセスを意図的に設けている。これは、直感的な第一印象と、情報や文脈に基づく解釈とのギャップに気付かせ、深い鑑賞へと導くためである。

オクリンクプラスを活用し、生徒同士が自分の考えを共有しながら可視化し、相互に読みの多様性に触れる機会をつくる。また、動画教材(ハチドリの映像)などを挿入することで、言語以外の感覚的理解から発想を広げる工夫も取り入れている。

最終的には、モチーフを用いた「顔はめパネル型自画像」制作への導入とし、観察→解釈→表現へと連なる一連の学びの流れを構築する。

(3)「主体的・対話的で深い学び」の視点から

生徒は、作品の情報を受け取るだけでなく、「この人物はどんな人だったのか?」という問いを通して、自分の感性と思考を通じて作品と関わる主体的な学びを経験する。また、ハチドリの象徴性に対して、「自分ならどんなモチーフを選ぶか」と考える過程を通じて、他者の表現を手がかりに自己理解を深め自己表現につなげていく。

オクリンクを用いた意見の可視化・共有や、複数の解釈から選択と根拠付けを行う活動によって、相互の違いを受け入れながら自分の立場を再構築する「対話的」な学びが可能となる。美術作品を介して他者と対話し、自分の感じ方・考え方の変化を実感することこそが、主体的・対話的で深い学びの核心である。